

毎月一回15日発行昭和48年12月15日発行・第48号(昭和45年9月4日第三種郵便物認可)

# リベルテール

12月号



Lebertaire VoL,V,No1

無政府主義者の機関紙

昭和四十五年 九月 四日第四種郵便物認可  
昭和四十八年十二月十五日発行第四十八号

定価一〇〇円(送料共)

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

昭和48年12月15日発行 Vo, V No 1

編集兼発行者 三浦 精一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦 精一)

## 目次

|                |         |    |
|----------------|---------|----|
| 心からの行動を        | 青井知三    | 1  |
| サンジカリズム紛争      | 塩長五郎    | 4  |
| 過渡期論―上―        | 清水修一    | 7  |
| サル芝居西遊記孫悟空現代犯  | 平川美夫    | 9  |
| 共産主義者とアナキストの対立 | ホセ・ペイラツ | 12 |
| 野火             |         | 22 |

リベルテールが創刊されたのは一九六九年十二月で、その創刊号には「アナルシズムは永遠の思想であり、普遍の思想である。これを歴史的、地理的、社会学的、経済学的に究明しようとする意欲的な若いリベルテールが全国的に、国際的に結ぶ機関である」ことを宣言した。それから三年、リベルテールはまだこの期待を実現しているとは言えない。しかしリベルテールは、アナルシズムが自由、平等、友愛という昔ながらの三原則に立って、最高の秩序アナルシーを実現しようとするアナルシスト(リベルテール)のグループであることに変わりはない。したがって現代社会の階層的権力構造を、人間の狡知と欺瞞にもとづくものとして否定し、万人一人一人の生の充実を実現しようとする社会的な変革を目指すものであることにおいても変わりはない。

こうした変革への過程において暴力、非暴力の二つの手段が考えられる。しかし暴に対して暴をもってすることが、如何にも勇壮で合理的で容易だとしても、暴力を用いること自体が他に対する権力行使であることを知るがゆえに、リベルテールは非暴力を立場とする。もちろん暴力と非暴力の境界は微妙だということ、非暴力は暴力主義以上に困難な道であることは承知の上である。この立場で連合し、連帯し、反権力、反戦の戦いを戦う (三浦)

## 心からの行動を

たいてい物を考える場合には、現代社会の主流的な行動規範が前提とされてある訳だが、真に自由になるには、まずこれを取り除かなくてはならない。

既成の価値観は心の真の声をきくためには障害となるからである。

行動してしまってから、なおその行動が気になって仕方のない時。

これは嫌なものである。どうすればいいのか。

「世間の常識からするとこのままではいけない。」

まず、右のことが思われるのが常である。

ところが現実変えられない。もう既にやってしまったのだから。

このような場合、世間の常識を棄てる以外にすべはない。

あらかじめ常識にとらわれない自由な考え方をしていれば、こんな迷いはせずにすんだであろう。

このことが自分の心だけの迷いである場合は容易に乗り越えられるが、現実問題としては世間対自分という政

## 青井知三

治的対立となつてしこりを残す。

自分のやった行動に心の支持が得られる限り、世間の既成価値観とは妥協する理由がない。あとは徹底抗戦あるのみだ。

人は、行動するたびに既成価値観と争う運命を荷っている。

一生何もしないでいられたら、彼は最も体制的に生きられるだろう。

人は死ぬために生き、崩すために価値を創造しつづけるのだ。

迷いや悔いは、既に粉碎された旧秩序に対する愛着である。

愛着はやがて見切りがついて、怨念となり新しい価値の創造へとむかう。

人間行動は美だ。どこをとってみてもそれは完全なる美だ。

蹉跎、言語に表し難い不満、かなえられぬ欲望の渦、それすらも美である。

自分の行動に美を見る時、死ぬことは眼中にない。生

命は全てを美にささげる。

## 一人で行えばよい

人間は男も女も、結局は一人でしか自由になれない。そこに美を見たら、

一人で自由のために死ぬのである。

## もう一歩進むべきだった

甘い、甘い。私の考えはまだまだ実に甘い。「家庭で応用できるトルコ四十八手集」なる記事が公然と書かれる時代に生きているのである。週刊現代十一月十五日号。女は正しくセックスの道具でしかないのである。もちろん、そのような女は女の一部でしかない。もう一方で、男をセックスの道具と考える女たちもいるのだ。

これは両極端かも知れない。けれども、われわれの時代はなんと放縱なことか。

その中で、性の平等を単純にとなえることがあたかも平常であるかのように思えるムードをつくり出している。虚像だ、これは全くでたらめだ。自由は自由を闘う者によってしか得られない。

トルコ、よし。ウーマン・リブ、よし。私は私の自由を闘うのみだ。

一人勉強することは、それを知る者を奮い立たせずにはおかない。

他人の目を気にすることなく、われ一人勉強すること。このことが私の目標である。

私は私に鞭打ち、努力する。そのこと自体が美しい。その上他人に力を与える効果が生じたとしたら、美しい上の喜びである。

## 人について

諸制度の終局的根拠が、国民の自由に表明された意志にあるのだ、という主張は、言うまでもなく当然のことである。

自分の経験から、人は若いときは欲求不満のはけ口として、きわめてラジカルになるものであり、その際、生命は毛よりも軽々しくとり扱われるものであることを認める。

これを若者のアナキズムと呼ぼうか、若気のあやまちといおうか、はたまた青春の彷徨といふべきか。

若者とは、体制にからめとられる前の人間であり、肉

体だけ大人になった子供である。

多くの失敗を通じて淘汰され、結局よき種は生き残り、悪しき種は滅びる。

失敗は誰にでもある。多くの失敗はこやしであるが、大失敗は死ぬことである。

文武両道を磨く、ということが正しいように思える。文だけではダメだし、武だけでもダメである。文と武が兼備されてこそ人格が完全となり、真に闘うことができる。

戦後日本において、文か武かどちらか一方を選べばよいかのような風潮がはびこった。

これは太鼓持ちの発想であり、こべへつらいを美德とする考えであり、自己の運命を他人まかせにするへっぴり腰の意見である。

## 雑誌の効用

雑誌を読むことによって、ぼくは精神が昂揚するのを感じる。それはおそらく、雑誌の記事の持つ奔放さから来るのであろう。それは自由というより、自由になろうとする熱意である。自由な感性といってもいい。

すなわち、素人が知ったかぶりをして、天狗になって記事を書くことのくったくのなさ。

これがいいのだ。バカ丸出し、それでいいのである。

深く求めようとすればきゅうくつだ。ジャーナリストとは、プロのヤジ馬である。ジャーナリズムなんてものはもとより無いのである。それは自由であるために、あってはならないのだ。

ぼくは、一つの感性にとらわれてぬきさしならなかったら、雑誌を読む。感性は感性によって退治できる。ぼくは雑誌によって救われる。

## 思考がとらわれる時

ぼくは今三つのテーマにからまれている。

「体系と非体系の間に生きることについて」

「禁欲的生活における満足こそぼくの理想ではないか？」

「高群逸枝とブーシキンに対する偏見をどうすればぬぐい去れるか？」

全く個人的な理由に発する。つまり、今ぼくが中大で法律学を勉強している学生であることから前の二つが、ぼくの女性に対する認識から残る一つが出てくるのだ。

およそ思考の始まりは主観的なものであり、自分だけの問題なのに、多分他人も同じような問題をかかえているのであろうなどとおせっかいなサービスをするのが、ものを書きたがる人の悪いくせである。

あらゆる創作がネタを割れば実は手前の私事に関することである。しかし、それでも人々はそれを読むのだから、人は百人百様といっても大方のところは全く共通していて、百人斉同なのである。

## サンジカリズム紛争

### アナキズム史論の曲折その四

アナ系労働組合の全国自由連合会が分裂して、自連と自協との確執の最も烈しかったのは、昭和三、四年の頃である。全国自連の分裂には、いろいろな問題が伏在していたのであろうが、一貫する主要問題は、階級斗争に対する見解の相違が基因になっている。これには岩佐作太郎の述べた階級斗争の概念が大きな原因になっていたのであり、従って岩佐の階級斗争の概念をはっきりさせる必要があり、これを要約すると、――階級斗争とは階級対立の是認であり、この斗争は資本主義制度を徹底的に破壊し、人間の社会性を解放し得る運動ではなくて、資本主義と妥協し、協調し、もしくはそれを相続せんとする保守的改良運動であって、決して革命運動ではない。――と云うのである。そしてこれに代るに黒色運動なる意義を宣揚し、――黒色運動とは決死の運動である。現代

創造の原点は己れの必要にある。思考が自己の必要にからめとられたら、必要の要請が止むまで考え込むことだ。何がどうなろうとそうする以外にしかたあるまい。

塩 長五郎

社会の下では人間としての生活を許されていない。シリシリと虐殺だ。然らざればシリシリと餓死だ。どうせ殺されるならば自ら進んで一か八かやって見よう。できないことがあるものか。行手には光明が見える。運命を等しくする兄弟姉妹がかたく手を握り、ここに決死の運動が起される。これが黒色運動の黒色運動たる所以である。――と。

このように黒色運動を宣揚し、階級斗争を卑下した規定は、必然的に労働運動における斗争の動きを自縄自縛して、動きのとれぬものにしてしまった。これは日常斗争を非難する傾向ともなり、日常斗争を非難するには非難するに足る問題もあったであろうが、それでは労働組合運動の機能を消失してしまうことになり、只革命運動と云う最高目標だけでは意味がない。要するにこの紛争

は、組合連合と黒色運動との相互連関が、考慮に入れられなかった不手際にあつたと思う。尚そればかりではなしに、右のような論争がアナキズムの肅正を行なうが如き挙に出てきて、階級斗争を認める説をサンジカリズムなりと別視して排撃し、これは恰かもアナキズムの敵かのように戦列から排除する傾向さえ出てきたのである。これには八太舟三の『階級斗争説の誤謬』が更にこれを煽ったのである。

八太舟三はこの著書の中で、まづ労働組合を三つの種類に区分し、一は労働者の利益を目的として組織、二は共産主義の手段となつて働く組織、三はその何れにも属しないで資本主義と真向から闘う自由連合主義の組合であると云う。これは云うまでもなく岩佐の説を裏書きしたもので、只管革命家の団体たらしめるための組織であつて、労働組合の機能は全く無視したものである。

このような労働組合論では労働者が満足する筈がない。分裂は必定のことと云える。いかにアナ系の組合とはいえ、日常斗争を軽視するが如きは、大衆獲得の無定見さを暴露することであり、その点では岩佐の云うように、山賊の山分けに等しい行為かもしれないが、これを簡単卒直に斯く言い放しては、組合運動の放棄を宣言するに等しい。

更に八太の説に奇怪を感じることは、サンジカリズムを無下に敵視し、曲説していることである。大杉時代には、サンジカリズムはアナキズムと異名同体のように扱われ、サンジカリズムはアナキズムの労働組合表現として見なされ、労働者の本能と斗争意識の命ずるままに進せんことを奨励した。そしてサンジカリズムは国家に頼ることなく、労働生産者の自治社会を建設することが大眼目であることが説かれていた。只この場合サンジカリズムには産業主義（工業主義）批判がはつきりしていないものがあつたので、一部からは都会中心主義だと云う批判はあつたが、敵視されてはいなかった。

ところが八太の説によると、サンジカリズムは階級斗争説、労働価値説をとるが故に、やがてマルクス主義に転落するものと決めつけている。これはまことに謬見も甚だしきものであり、彼にはサンジカリズムが国家に頼ることなしに労働自治社会を建設すると云うことには一指をも触れてはいない。只敵視することだけに終っている。これは明かに間違つたサンジカリズムを流布したことであり、八太の過失は実に大きい。

このような間違つた規定が紛争を大きくしたので、アナキズム運動全体の消長をも左右したのである。

これは労働組合運動ばかりではなく、文化グループに



も波及して、当時アナキズム唯一の文化グループであった『文芸解放』なき後の唯一の思想文芸雑誌『黒色戦線』（昭和四年一月創刊）のグループにも波紋を投げて、折角の文化グループを、ここでも紛争解体するの止むなきに至らしめてしまった。

八太の説のように、サンジカリズムがそれ程アナキズムの敵に廻るものであろうか？ 当時この誤謬を正しく指摘し反論したのが、石川三四郎の「マラテスターの労働組合論」である。この論文は『黒色戦線』解体後、直ちに発行した『黒戦』創刊号に書かれたもので、マラテスターがサンジカリズムとアナキズムとの関係も実証的に述べたもので、当時はこの関係者に異常な注目の的となったものである。またこの雑誌の巻頭論文には、「階級斗争について」なる表題で、階級斗争に対する『黒戦』の立場を鮮明にし、マルクス主義の階級斗争説は、政治権力を奪取して一党独裁制への道であるのに対し、アナキズムの階級斗争は、資本主義組織の根本的変革と同時に、いかなる政治的権力の支配をも排除する斗争であって、自由連合主義と相容れないものではないことを宣言した。

以上のように、当時はこれらの問題が神経過敏的に作用して、暴力沙汰さえ随所に行なわれて、アナキズムと

サンジカリズムとの和合は容易に得られなかった。これは現在においても幾分燻っていないこともない。さて戦後何故にアナ系労働組合が育成されなかったのか？、これは何人も気にかかる問題であり、また重大な問題である。

まことに戦後の日本はアメリカより与えられた自由によって、戦前とは比較にならぬ社会状況に変化した。かつての非合法運動は解放されて、自由に政治斗争が出来るようになったし、それで労働運動も、この政治斗争の一環とされて、政治斗争のみが唯一の無産者解放運動であるかのように、錯覚を深からしめてきた。

かくの如き変化した社会状況の中で、アナキズム労働運動が、戦前の戦法だけで事足りるであろうか？ もしこれで事足りるとするならば、それは認識錯誤も甚だしいと云わざるを得まい。すでにクロボトキンも『近代科学とアナキズム』の中で明言しているように「アナキズムは一つの社会理想であり、これは科学的方法によって実現しようとするものである。」と。これは単に反抗反逆の情感を燃して突進する決死の運動だけで事足りるものではない。これには将来社会に対する大体のイメージを保持して邁進する必要がある。従って我々は、この点を重視して再出発する用意がなければならないであろう。

## 過渡期論 一上

### 1 共産主義建設と過渡期

「アナキズム」において過渡期が存在しうるかどうか。それは問題ではなく、問題なのは共産主義社会の建設において、過渡期が存在しうるかどうか、である。

答は非常に簡単である。一晚で革命にケリがつかない以上、過渡期は存在するのである。

共産主義そのものは、革命のその日から実現されるし、又、されねばならない。

さらに革命（ブルジョア国家の打倒）以上にさえ実行されるのである。

しかし、この共産主義は過渡期の共産主義であり、「低次」の共産主義である。

「社会主義社会」は国家機構と国家権力を必要とし、

労働自治社会の建設運動とに全力を集中して邁進することが重要な課題である。かくて労働運動はこの方向に進めるよう努力する必要がある。

### 清水修 一

その本質は改良された資本主義ウクラウドであり、それ故、ブルジョア社会の延長であり、「共産主義」（たとえ「低次」のでも）とは全く無縁である。このような「社会主義社会」は「投票」によって実現可能であり、何も「社会革命」などを必要としない。

又、それが「過渡期」（共産主義への）などであるはずがない。

現在の「ソヴィエト社会主義共和国連邦」という名の国家は、まさに「社会主義社会」（もちろん「ソヴィエト」ではない）であり、それ故、過渡期以前のブルジョア社会の一変形である（ソ連はすでに階級斗争の消滅した「全人民の国家」だそうであるが、それならばもうそろそろ「死滅」してもいいところである）。

ソ連は、ブルジョア社会の最高形態たる帝国主義国家であり、米帝、中華帝、日帝、西欧帝と並ぶ、我々の主

要な敵である。

中華帝は「無産階級制」なのだそうだが、彼らは国内の少数民族を抑圧し、さらに台湾「解放」と称して、台湾人民への植民地支配を目論み、田中の「北方領土返還」を支持することによって、アイヌ・ウタリに敵対している。

それ故、アイヌ・モシリの当面の敵は日帝、ソ帝、中華帝である。

## 2 過渡期と国家

(1)

ブルジョア国家は廃止される。しかし国家としての国家はブルジョア国家と共に廃止されるが、国家そのものは未だ廃止されたわけではない。

ブルジョア国家は人民の暴力に権力によって廃止されるわけであるが、ブルジョア国家の廃止された後にも、なおブルジョアジーは必死の反乱を組織するだろう。

人民はこのブルジョアジーの反乱を抑圧・粉砕しなければならぬ。これは明確に「人民の権力」であり、人民の（あるいはプロレタリアートの）独裁である。

又、当然にも共産主義は一国では不可能であり（社会主義は一国で可能である）、一国の革命から、数国の、そして世界革命への過渡期が存在する。

我々の斗いは世界革命戦争を目指すものである。又、革命戦争を闘うには、共産主義が不可欠である。

「明日ある大都市をして、包囲またはそれに類する何等かの災禍に襲わしめよ。諸君は共産主義の思想がたちまちにして実現されんとするのを見るだろう。『パン』の問題、すなわちすべての人に食物を供給する問題が、その都市の緊急問題となつて、ある個人の勤労に対する報酬などという問題は影をひそめるだろう。各人の必要は、食料品の共同貯蓄に対して、各人の分け前を要求する権利となるだろう。」（クロボトキン 共産食堂）

共産主義なしに革命戦争を闘うことはできないのである。過渡期は低次の共産主義の時期であるとともに、革命戦争の時期である。

(2)

プランキズムの主要な要素は①蜂起による権力奪取②

レーニンによれば「あらゆる国家は被抑圧階級を『抑圧するための特殊な力』である」（国家と革命）

それ故、人気によるブルジョアジーに対する「抑圧」は国家的な機能であり、それ故この段階では「人民の権力」は存在しており、「国家」は未だ廃止されていない。しかし、人民はブルジョアジーを抑圧するには武装した大衆の簡単な組織——すなわち「ソヴィエト」——によって可能なのである（レーニン同）。

この段階では、人民はもう国家としての国家（議会、政府、官僚、常備軍、警察）は、ブルジョア国家の廃止とともに廃止してしまつたけれど、国家そのものは完全に廃止されたわけではないのである。

それ故に、この段階は過渡期である。

「国家」は「廃止」されるのであって「死滅」するのではない。

しかし、ブルジョア国家の廃止とともに「廃止」されるところ考えるのは誤りである。それ故、このように言うことができる。

国家は死滅するのではない。そうではなくて死滅せられるのである、と。

## サル芝居西遊記孫悟空現代犯

孫悟空（朝鮮人は損国イソンコクと発音する）が、斗雲に乗ってK O I A製の魔法の杖を持って倭国遊曆の金大中大統領を白昼どうどうと都から誘拐に成功した。さすが金東雲（キントウン）の魔力は偉大大である。しかし、倭国の人民の怒りにふれ、金大中先生を倭国に返せと三選法史（朴の三選法案のこと）にかけあったところ彼言わく、  
白昼の斗雲は白だと言つてゆずらない。倭国の大臣言わく、損国の陸に上つたのは夜で黒く見えたとながいにゆずらず。

白と黒のサル芝居を見て居る観客の目を白黒させた。金東雲の白黒をハッキリさせないと三選法史の損国の罪成に金消失（鐘必）としては一大事とばかり、恥をしのんで金東雲は黒と認め朴家を珍書を倭国に送り珍謝した。倭国大臣は面対（メンツ）が保たれたと珍談と共に褒書（返書）の珍書を三選法史に送った。金東雲の魔力が使えないように損国（孫悟空）の頭に金の和（環）をはめた。

サル芝居としてはまずまず第一幕の終り。

（平川美夫）

革命家による独裁③全人民の武装、である(①②においてはバブーフがさらに先駆している)。

①において、マルクスはブランキズムを「一揆主義」と非難したが、これは誤りである。

レーニンが十月革命において(ベルンシュタインが非難したように)正しくブランキストであった。

②の革命家による独裁はマルクス主義にプロレタリア独裁(マルクス主義におけるそれは、ブランキズムと同様に、まさにプロレタリアに対する独裁である)として継承され、さらにバクーニンはアナキストによる「不可視の独裁」として継承する。バクーニンは正しく「人民の権力」「人民の独裁」の主張者である。

人民が斗いを決意し、斗争を開始した時、それがたとえ、いかに弱少なものであっても、国家にとって明確に「権力」として存在する。

暴力的であれ、非暴力的であれ、すべての「斗い」は「権力」である。それ故「暴力を用いること自体が他に對する権力行使であることを知るがゆえに、リベルテールは非暴力を立場とする」という主張は意味を持たない。「権力」を完全に否定することは「斗争」を「革命」を放棄することである。

たとえば、クロボトキンが全ての「権力」を否定しよう

と、彼は政府にとって「権力」として存在したのである。又、「反權威主義」などといっても、權威のないアナキズムなどは国家権力にとっては、全く衛生無害であり、存在する意味はないのである。

「全人民の武装」は、人民の権力の、さらにそれが過渡期であることの唯一の保障であり、「常備軍」という革命の寄生体を駆逐する最も有効な方法である。

レーニンは「官僚制度と常備軍、これはブルジョア社会の肉体にやどる『寄生体』、この社会をひきさく内的矛盾によって生み出された寄生体、だがまさに生命の毛穴を『ふさぐ』寄生体である」(国家と革命)「官僚的、軍事的国家機構の破壊が『あらゆる真の人民革命の前提条件』である」(同)

と言ったが、彼は常備軍を(もちろん官僚も)手ばなすことはできなかったし、全人民の武装などではきようはずもなかった。レーニンの党、政府、軍はまさに「反人民的」であったのだ。

「全人民の武装」はバクーニンを経て、ウクライナとスペインに、パルチザン、民兵として継承されたが、民

兵と正規軍は対立するものではなく、民兵正規軍、民兵パルチザンとして止揚される。

又、ウクライナ・コミューンは武装した大衆によって組織されたソヴィエトであり、まさに「人民の権力」「プロレタリア独裁」であった。

ブランキズムにおける、蜂起——権力奪取——独裁はブルジョア国家機構を破壊することではなしに、ブルジョア国家機構そのものを掌握することであった。

マルクスは「プロレタリアートは、できあいの国家機関をたんにその手にぎり、それを自分自身のためにつかうことはできない」(フランスにおける内乱)と一見正しく云ったけれども、私の見解では「プロレタリアートはあらゆる国家機関をたんにその手にぎり、それを自分自身のためにつかうことはできない」。

過渡期の「国家」は「国家機関」などを持たないのである。まさに「半国家」とはそのような「国家」であり、「プロレタリア独裁国家」なるものでは決してない。

マルクス主義におけるプロレタリア独裁国家(すなわち社会主義国家である)とブルジョア国家との間に本質的な差異を見い出すことはできないのであるが、それ故マルクスのこの誤りとブランキのそれとは基本的に同じ

である。

マルクスによると「国家」(プロ独国家)は「死滅」するわけであるが、ブランキズムにおいても同様に「国家」(革命家によって掌握されたブルジョア国家)は「死滅」するのである。

しかし、パリ・コミューンにおいて、ブランキストは「コミューン」という革命的な組織形態を創出した。

この「コミューン」は、レーニンの「プロレタリア独裁」などよりすぐれてプロレタリア独裁であった。

それ故、マルクス・レーニン主義は未だブランキズムをのりこえてはいないのであるが、アナキズムは、バクーニンによって、さらにマフノのウクライナ・コミューン、スペイン革命によってのりこえたのである。